

機関番号：12613

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19330141

研究課題名（和文） 社会的文脈における自己と他者についての感情推論

研究課題名（英文） Emotion inferences for self and other in social context

研究代表者

村田 光二（MURATA KOJI）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：40190912

研究成果の概要（和文）：本研究では、他者の感情を他者がおかれた社会的文脈情報から自発的に推論することを示す実証的証拠を得た。また、状況への注目や音声による情報提示など、この推論を促進する要因について示唆を得た。他方で、後悔感情の予測におけるインパクトバイアスの実証的証拠を示した。また、学業課題におけるポジティブおよびネガティブな感情予測が、後の達成動機づけを強めることをいくつかの現場実験で示した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we obtained empirical evidence that people could spontaneously infer other people's emotions from situational information. The results also suggested factors that facilitated the inference, such as attention to situation and presentation by vocal information. Then, we obtained empirical evidence of the impact bias in forecasting regret. Further, we found in some field experiments that forecasting positive or negative affects after completing an academic task could strengthen achievement motivation to do the task afterwards.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|-----------|------------|
| 2007年度 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |
| 2008年度 | 1,900,000 | 570,000 | 2,470,000 |
| 2009年度 | 1,900,000 | 570,000 | 2,470,000 |
| 2010年度 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 7,800,000 | 2,340,000 | 10,140,000 |

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：自発的感情推論、状況情報、音声情報、感情予測、インパクトバイアス、後悔、心理的免疫システムの無視、達成動機づけ

1. 研究開始当初の背景

（1）社会心理学のこれまでの対人認知研究では、性格や能力など安定した特性を知る過程に焦点が当てられてきて、感情や信念など、他者の一時的な心的状態を知る過程の研究が乏しかった。しかし、日常の対人関係を考へても、発達心理学などで盛んに研究されるようになった「心の理論」研究を考へても、

感情推論の研究は重要で有用だと考えられたことが背景の1つである。

（2）ハーバード大学のギルバード教授などが「感情予測」という概念のもと、自己の将来の感情推論の研究を開始した。この推論にはバイアスが伴うことや、この推論に基づいて人が行動することなど興味深い検討課題

のある、実り豊かな研究領域だと考えられたことがもう1つの背景である。

(3) 自己の内的状態を他者に投影したり、他者の感情に共感する現象から考えて、他者についての感情推論と自己の感情推論とは機能的な関連や共通性を想定できるだろう。両者を統合的に捉える理論的枠組みを構築したいと考えたことが本研究を構想した3番目の背景である。

2. 研究の目的

(1) 他者の感情を他者がおかれた社会的文脈(状況)情報から自発的に推論する証拠を示すことが第1の研究目的である。

(2) 状況情報からの自発的感情推論を促進する要因を示すことが第2の研究目的である。

(3) 将来の出来事に反応して生じる自己の感情を過大に推論する傾向(インパクトバイアス)を日本において追試することが第3の研究目的である。

(4) インパクトバイアスを低減する要因を示すことが第4の研究目的である。

(5) 課題遂行後の感情予測に関わるインパクトバイアスは、その課題遂行への動機づけを強める適応的機能を持つことが予測される。この仮説を実証することが5番目の研究目的である。

(6) 自己と他者の感情推論を統合的に捉える理論的枠組みを提案することが6番目の研究目的である。

3. 研究の方法

(1) 小森・村田(2010)では、目的1と2に関する実験研究を行った(雑誌論文①)。まず、この研究の方法を紹介する。

この研究の実験1では、手がかり再生パラダイムに基づく自発的感情推論の実験が行われた。まず参加者に「Aさんは銀行で30分待たされた」といった状況記述文を15文読ませ、記憶するように求めた。これら状況記述文は、それぞれ異なる感情を推測可能なものであった。その際に、単に記憶するだけの条件と、主人公になったつもりで記憶するように求めた視点取得条件を設けた。次に妨害課題を行った後に、参加者は記憶した文の再生を行ったが、手がかりとして状況から推測可能な感情語(「イライラ」)、状況に関連する意味語(「金融」)、なしの3つの被験者内条件を設けた。この再生成績を得点化して分析した。

実験2では、再学習パラダイムに基づく自

発的感情推論の実験が行われた。まず接触フェイズで、参加者に主人公のニュートラルな顔のイラストと名前、少し長めの状況記述文を12人分提示した。このうち8つの記述文は「怒り」「驚き」「喜び」「悲しみ」のいずれかの感情を推測可能なものであった。この際に、参加者の半数には状況を想像するよう、残り半数には主人公の感情を想像するよう教示した。次に学習フェイズで、16組の名前と顔のペアを参加者に提示した。このうち4ペアは接触フェイズの主人公の感情と一致する表情を示していて、他の4ペアはそれと不一致の表情であった。さらに初出の人物のペアも統制条件として設けた。その後遅延課題を行わせ、最後の再認フェイズでは、主人公名を示して、その表情が4つの感情のどれであったのかを選択させた。この再認成績を分析した。

(2) 目的2については、小森・村田(2008a, 2008b, 2010)でも検討を行った(学会発表⑦⑥①)。これらの研究では、音声情報からの自発的な他者の感情推論は頑健に示されることを予測して実験を行った。次にこれらの方をまとめて紹介する。

この一連の実験では、状況記述文を読み上げたものを録音して実験参加者に聞かせた。次に遅延課題を行わせた後に、再認文を文字で提示した。再認文のリストには、元の文、感情語を加えたもの、意味的に無理のない語を加えたもの、新規のフィラー文が含まれていた。このうち、状況記述文から推論可能な感情語が追加された文を誤再認する程度(あるいは再認の確信度)を調べ、他の場合と比較した。比較する条件として、元の文の語順を変換したもの(学会発表⑥)や不一致感情語を加えたもの(学会発表①)も設けて実験を繰り返した。

(3) 目的3の証拠は、道家・村田(2009)などで示した(雑誌論文②)。ここではこの実験の方法を紹介する。

実験では、7種類の飲み物の人気ランキングを当てるクイズに参加してもらった。参加者には正しいと思う順番を2通り作成してもらい、最後に1つを選ばせた。その結果、選んだ順序がはずれていたが、2通りのうちもう1つが正解だった場合を僅差条件、2つともはずれの場合を大差条件とした。その後予測者条件の参加者には、はずれたことを知った直後および10分後の感情について推測させた。経験者条件の参加者には、2分後に僅差または大差のはずれをフィードバックして、そのときの感情を回答させた。さらに遅延課題の後、10分後にも自分の感情を回答させた。そして、感情尺度に含まれていた後悔項目の得点を実験デザインに沿って分析した。

(4) 目的4については桑山・村田 (2009) などいくつかの実験で検討した (学会発表④)。この実験では、インパクトバイアスの要因の1つである「心理的免疫システムの無視」を取り除く方略の有効性を検討した。

実験参加者には課題を実施する前に、次の3通りの思考条件を設定した。改善思考条件では、ネガティブな出来事を経験した後はどうしたら気分が改善するのか考えさせた。持続思考条件では、ネガティブな気分が持続してしまうことを考えさせた。そして統制条件では中立的内容の話題を考えさせた。その後架空の論理的思考力テストについて説明して、それができなかつた場面を想像させて、そのときの感情を予測させた。

(5) 目的5については村田・桑山 (2009)、道家・桑山・村田 (2010a, 2010b) で現場実験を行って成果を得た (学会発表⑤③②)。これらの方法をまとめて紹介する。

大学の授業期間の途中の時期に教室で、成績評価に関わるレポートあるいはテストの成績が良かった、悪かった、あるいは普通であった場合を想像させて、そのときの感情を回答させる調査を行った。その後、レポート提出時、あるいはテストの時期に調査を実施して、レポート課題やテスト勉強に取り組んだ時間など、課題達成の動機づけを調べた。2つの調査を対応させて、感情予測の条件に応じて動機づけの指標が異なるかどうかを分析した。

(6) 目的6については本研究課題に関わるワークショップや研究会を開催する中で、他の研究者と討議しながら考察を深めた。また、村田 (2010 ; 図書①) を執筆し、社会的認知の最新の研究に関する当該図書を編集する過程で理論的な考察を行ってきた。

4. 研究成果

(1) 小森・村田 (2010) の実験1では、以下の表に示された結果を得た。

| | 感情語 | なし | 意味語 |
|------|------|------|------|
| 記憶 | 4.09 | 1.37 | 5.61 |
| 視点取得 | 5.36 | 1.17 | 4.71 |

(得点の範囲 : 0-15)

手がかり語条件の主効果は有意であり ($F(2, 114)=51.2$ $p<.001$)、感情語条件は手がかりなし条件よりも記述文の再生を促進するという仮説が支持された。このように自発的感情推論の証拠を得たが、意味語条件との間には差が認められなかった。

実験2では、表2に示された結果を得た。

| | 一致 | 不一致 | 統制 |
|------|------|------|------|
| 状況想像 | 2.60 | 1.96 | 1.78 |
| 感情想像 | 2.16 | 1.52 | 1.32 |

(得点の範囲 : 0-4)

学習タイプ条件の主効果は有意であり ($F(2, 174)=21.0$ $p<.001$)、一致条件では他の2条件よりも再認正答数が高く、自発的感情推論が生じたことを示す有力な証拠を得た。また、想像条件の主効果も有意で ($F(1, 87)=6.06$ $p<.05$)、状況を想像した方が感情を想像したよりも正答数が高かった。これは、行為者に注目するよりもその状況に注目した方が、感情推論が促進される場合があることを示すと考えられる。

(2) 最新の実験の結果を報告すると (学会発表①)、音声提示された文から推論できる感情語を追加された場合には、推論できない語を追加された場合よりも、再認時の確信度が高いことが示された ($M=3.70$ vs. 2.40 $t(69)=10.9$ $p<.001$)。このように、音声情報からの自発的感情推論は、文字情報からの推論よりも自然の状況に近く、推論を促進する可能性が考えられる。

(3) 道家・村田 (2009) の実験では、以下の図1の結果を得た。

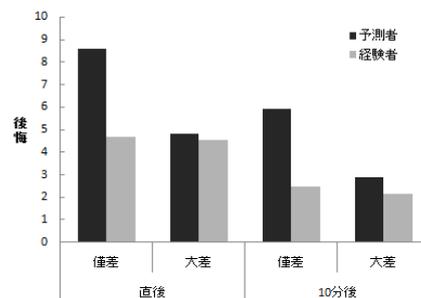


図1 後悔指標の平均値

直後の後悔については、はずれ方 (僅差・大差) の主効果 ($F(1, 60)=9.80$ $p<.005$)、役割 (予測者・経験者) の主効果 ($F(1, 60)=11.33$ $p<.005$) とも有意であったが、交互作用によって制限されていた ($F(1, 60)=8.78$ $p<.005$)。これは僅差条件においてのみ、予測者は経験者よりも強い後悔を示すものであった。この結果は10分後についても同様で、全体として後悔の程度が弱まったが、分析結果は同じであった。このように、後悔感情についてのインパクトバイアスの明確な証拠が得られた。

(4) 桑山・村田 (2009) の実験では、改善思考条件において統制条件よりもネガティブ感情予測が弱まり、心理的免疫システムを考慮することによってインパクトバイアスが低減される可能性が示された。しかし、持続思考条件でも統制条件よりもネガティブ感情予測が弱まっており、ネガティブ経験を思考すること自体が感情予測を低減する可能性も考えられた。

(5) ここでは最新の2つの実験(道家・桑山・村田, 2010a, 2010b) 結果を報告する。まず、学会発表②では、中間テストの翌週に、期末テストに向けての勉強時間の見積もりを行わせた。その結果、ネガティブ感情を予測した場合(2.71h)には、統制条件(2.25h)よりも長い時間勉強すると回答した。ポジティブ感情を予測した場合には(2.22h)、統制条件との間に差が認められなかった。

次に、学会発表③では、期末テストの直前の授業のときに、合格点を上回った場合または下回った場合の感情予測を行わせ、試験勉強準備についての予測を行わせた。その結果、ポジティブ感情を予測した場合(8.94)には、統制条件(7.96)よりもテスト勉強への動機づけが高まっていた。しかし、ネガティブ感情を予測した場合には(7.83)、統制条件との間に差が認められなかった。

以上のように、ネガティブおよびポジティブ感情を予測すると達成動機づけが高まる証拠が得られたが、必ずしも頑健に示される現象ではないかもしれない。

(6) 自己と他者の感情推論を統合的に捉える理論的枠組みを提案するという6番目の研究目的については、まだ現在検討中であり、今後まとまった論考を完成させたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

- ① 小森めぐみ・村田光二 状況情報からの自発的感情推論—その生起と視点取得の役割の検討— 実験社会心理学研究, 査読有, 50(1), 2010, 2-14.
- ② 道家瑠見子・村田光二 後悔の過大推測: ネガティブ・フィードバック直後と時間経過後の予期的後悔と経験後悔 実験社会心理学研究, 査読有, 48(2), 2009, 150-158.

[学会発表] (計34件)

- ① 小森めぐみ・村田光二 音声情報を用いた自発的感情推論の検討(3)—不一致感情語追加記述との比較— 日本心理学会第

74回大会, 2010年9月20日, 大阪大学豊中キャンパス

- ② 道家瑠見子・桑山恵真・村田光二 感情予測がテスト勉強の動機づけに及ぼす効果— 日本心理学会第74回大会, 2010年9月20日, 大阪大学豊中キャンパス
- ③ 道家瑠見子・桑山恵真・村田光二 いい気分目指してやる気分: 感情予測がテスト勉強の動機づけに及ぼす効果— 日本社会心理学会第51回大会, 2010年9月18日, 広島大学東広島キャンパス
- ④ 桑山恵真・村田光二 インパクトバイアスの低減方略の検討—心理的免疫システムの考慮によってインパクトバイアスは低減するか?— 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会, 2009年10月11日, 大阪大学吹田キャンパス
- ⑤ 村田光二・桑山恵真 レポート課題における感情予測—課題遂行との関係を探る— 日本心理学会第73回大会, 2009年8月26日, 立命館大学衣笠キャンパス
- ⑥ 小森めぐみ・村田光二 音声情報を用いた自発的感情推論の検討(2)—語順変換条件との比較— 日本心理学会第72回大会, 2008年9月19日, 北海道大学札幌キャンパス
- ⑦ 小森めぐみ・村田光二 音声情報を用いた自発的感情推論の検討(1)— 日本感情心理学会第16回大会, 2008年5月17日, 大妻女子大学千代田キャンパス

- ⑧ 道家瑠見子・村田光二 The influence of personal agency in decision on the action/inaction regret. The 9th Annual meeting of Society for Personality and Social Psychology, 2008年2月9日, Albuquerque, USA

- ⑨ 小森めぐみ・村田光二 Illusion of courage under physical versus social fear. The 9th Annual meeting of Society for Personality and Social Psychology, 2008年2月8日, Albuquerque, USA

[図書] (計1件)

- ① 村田光二 感情予測 村田光二(編著) 北大路書房『現代の認知心理学6—社会と感情』2010, 305(121-146).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 光二 (MURATA KOJI)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：40190912

(2) 研究協力者

小森 めぐみ (KOMORI MEGUMI)
一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程

道家 瑠見子 (DOHKE RUMIKO)
亜細亜大学・短期大学部・特任講師
研究者番号：20562945

桑山 恵真 (KUWAYAMA EMA)
(2008-2010 年度)
一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程

埴田 健司 (HANITA KENJI) (2008 年度)
一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程

井上 裕珠 (INOUE YUMI) (2009 年度)
一橋大学・大学院社会学研究科・修士課程

馬場 洋香 (BABA HIROKA) (2009 年度)
一橋大学・大学院社会学研究科・修士課程

田戸岡 好香 (TADOOKA YOSHIKA)
(2010 年度)
一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程

渡邊 さおり (WATANABE SAORI)
(2010 年度)
一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程